



写真1 東京国立ロータリークラブ創立10周年記念除幕式：1979（昭和54）年5月6日

はじめに

国立市広報担当から当館に移管された写真資料からピックアップしてのご紹介。今回は、国立駅南口駅前広場の円形公園にある時計塔に関する写真等を紹介します。

時計塔除幕式

写真1は、1979（昭和54）年5月6日に行われた時計塔の除幕式を撮影した1枚です。この除幕式については、当時の国立市報で写真を掲載して報じており、ここでは以下のように紹介しています¹。

時間を大切に！

国立駅南口の円形公園に時計塔が設置されました。これは、国立市のロータリークラブが寄贈したもので5月6日に除幕式が行われました。

この時計塔は、高さ6.8mで駅、富士見通り、旭通りの三方向から時刻がみえるようになっています。

この記事にあるように、円形公園に設置された時計塔は、東京国立ロータリークラブが創立10周年を記念して寄贈したもので、その時計塔が現在でも



写真2 国立市報 第352号に掲載された写真

国立駅前で時を告げているのです。

1 『市報くにたち』第352号（1979年6月5日）5面「カメラかついで」

東京国立ロータリークラブは、1969（昭和44）年2月23日に、32名のメンバーによってスタートしており、同年3月26日付で国際ロータリーの加盟が承認され、正式にクラブが発足しています²。

同クラブでは5年ごとの周年記念事業として、ロータリー財団や国立市社会福祉協議会などに基金を寄附するほか、国立市へモニュメント等の寄贈も行っています。その最初のモニュメント寄贈が、10周年記念事業として行われた国立駅南口駅前広場にある円形公園内への時計塔の寄贈でした³。

この時計塔設置については、当時の新聞も報じており、その記事からは、市報では取り上げられなかった情報を得ることができます⁴。

建設当初の時計塔には、スピーカーが上に取り付けられており、そこから午前7時と正午、午後9時にチャイムが鳴る仕掛けとなっていたようです。「周辺五百円まで鳴り響くという」（『東京新聞』）と報じられていますので、相当なボリュームでチャイムが鳴っていたのではないかと想像されます。また、それだけ音量のでるスピーカーであったため、「周辺の交通が混雑した場合には、マイクを通じて交通整理もできるようになってい」（『毎日新聞』）たそうです。

写真1・2の時計塔をみると、確かに時計の文字盤の上にスピーカーが確認できます。どうやら国立駅側と大学通り側の南北へ向けて、2つのスピーカーが設置されていたようです。当時を知る方には、時計塔のチャイムを聞いたことがある、覚えているという方もいらっしゃるのではないのでしょうか。どんなチャイムが鳴っていたのか気になっています。ご存じの方は是非ともご教示のほど、よろしく願います。

国立市広報から当館に移管された写真の中には、この時計塔除幕式を取めたとみられる写真が16枚確認できます。時計塔の除幕式であるが故、時計塔が当然写し撮られており、それによって撮影された時刻が分かる写真がいくつかあります。

新聞報道では、「六日午前十一時除幕式を行う」



【上】写真3 除幕式 式典中 【下】写真4 式典後



2 『創立四十周年記念誌』（東京国立ロータリークラブ、2010年）「クラブ40年のあゆみ」23頁

3 『創立50周年記念誌』（東京国立ロータリークラブ、2019年）の26頁から28頁で、創立記念事業から50周年記念事業までの各周年事業が紹介されています。その「10周年記念事業」では、「10周年記念では、JR国立駅南口の円形公園内に時計塔を寄贈しました。広い大学通りの向こうに見える、赤い三角屋根の駅舎は国立のシンボルです。そして駅前ロータリーを中心にした国立駅前の広い空間も自慢のひとつです。そのロータリー内の公園に立てられた時計塔は、周囲のどこからでも時刻が読めるよう三面になっていて、多忙な市民にとっては欠かせない存在になっています」と時計塔の寄贈を紹介しています。

4 時計塔設置を報じた新聞記事としては、①『東京新聞』多摩 武蔵野 東京版（1979年5月2日）13面「国立駅前に時計塔寄贈

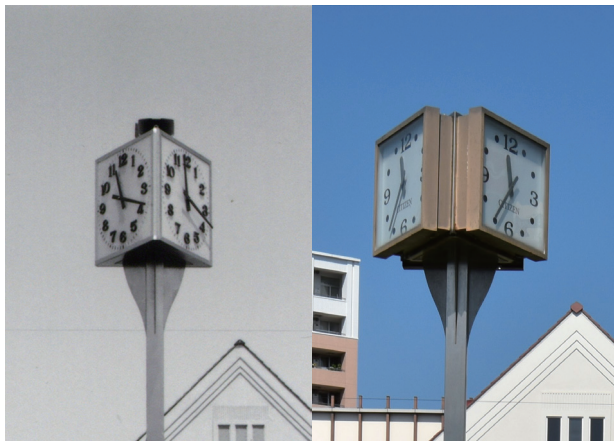
『東京新聞』と報じていますので、写真1は除幕式が開始された正にその時に撮影された1枚であることが分かります。また、写真1・3で時計塔の下の部分を覆っている白布は、11時10分頃まではかけられていますが、同15分頃には外されています。この5分間で時計塔の除幕がなされたようです。さらに写真2・4からは、式典が終わって関係者が談笑している様子が確認できます。いずれも11時20分まで時計の針が進んでいませんので、除幕式は全体で20分弱の式典であったようです。



写真5 国立市報 第477号に掲載された写真

時計塔の時計取替え

国立駅を利用されていて、円形公園の時計塔をよくご覧になっている方は、除幕式の写真に何か違和感を覚えるかもしれません。それは、時計塔の時計が現在と違うデザインであることに起因しているのではないのでしょうか。



時計塔の時計比較

【左】1979年除幕式：写真2 【右】2021年10月撮影

円形公園にある現在の時計塔と、写真に収められた除幕式当時の時計塔を比べると、時計のデザインが結構違っているのが分かります。

時計塔の時計の変更については、1988（昭和63）年7月5日発行の市報で、写真を掲載して次のように報じています⁵。

夜空に映える 駅前ロータリーの時計

国立駅南口のロータリーにある時計塔が、夕暮れとともに、ライトを浴びて、夜空にくっきり時を告げます。

この時計塔は、昭和54年に国立ロータリークラブから寄贈されたものですが、最近では、長年の風雨に針が狂うことも多くなり、市では時計を太陽電池式に替え塔を浮かび上がらせるため、ライトを当てるなどの改修を行いました。

この市報の記述からすると、除幕式から9年を経た1988年の改修に際して、時計塔の時計が取替えられているようです。市報掲載の写真は、夜間に撮影されたものであるため明確には分かりませんが、時計上部に設置されていたスピーカーは、改修後にはなくなっているように見受けられます。

午前7時・正午・午後9時と日に3回、周辺500mまで鳴り響くといわれた時計塔のチャイム音。この音色は、残念ながら設置後10年を経ずに聞くことができなくなってしまったようです。

なお、この市報の記事からすると、現在でも行われている時計塔のライトアップは、1988年の改修から導入されているようです。

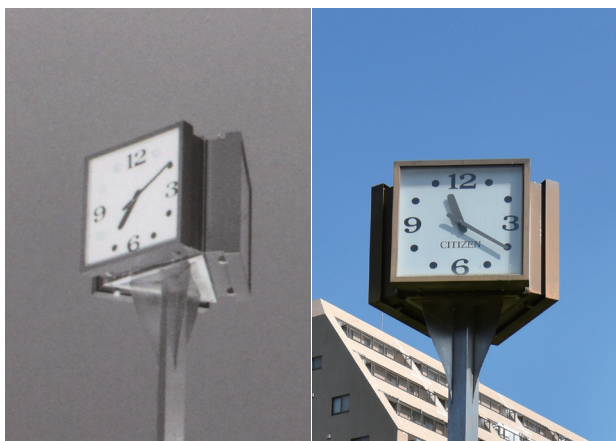
時計塔の時計について、1988年改修時のもの（写真5）と現在のものを比較すると、見た目は似たような時計です。しかしながら、1988年に太陽電池式時計に改修されてから、既に35年程が経過しています。当初設置された時計が10年も経ずに取替えられていたことを考えると、1988年以降に更に時計の改修が加えられていてもおかしくありません。その点を確認できる資料が今のところ見当たらないのですが、国立市へ確認したところでは、時計

東京国立ロータリー（原文ママ）、②『毎日新聞』東京多摩（1979年5月8日）20面「国立駅前に彫刻風時計塔」、③『朝日新聞』東京多摩（1979年5月14日）21面「のっぽ時計塔 国立」があります。なお、いずれも『国立市に関する新聞記事検索（3）』（くにたち中央図書館、1989年）で検出できる記事で、くにたち中央図書館では各記事の内容を確認することができます。

5 『市報くにたち』第477号（1988年7月5日）7面「カメラかついで」。なお、『市報くにたち』（1987年1月5日 第457号以降）などの国立市の刊行物は、市のホームページからデジタルブックで閲覧することができます。

くにたちデジタルライブラリー

国立市 HP : <https://www.city.kunitachi.tokyo.jp/soshiki/Dept01/Div01/Sec02/gyomu/0358/0360/0363/1519978218670.html>



時計塔の時計比較

【左】1988年改修時：写真5 【右】2021年10月撮影

塔の時刻をより正確に表示させるため、更に電波時計へと変更がされているそうです。その変更時に時計自体が替えられた可能性があるとの情報を得ました。

1988年の太陽電池式時計への改修で、建設当初の時計とはデザインが変わりましたが、その後は見た目に大きな変化はないように感じます。国立市からの情報にあるように、電波時計への変更時に時計が替えられていたとしても、1988年改修時のものからデザインに大きな変化はなかったようです。

円形公園の時計塔が設置されて44年以上が経過していますが、現在の時計のデザインとなってから長い時間が経過しています。時計塔除幕式の写真でみる建設当初のデザインの時計よりも、現在のそれの方が見慣れたものとなっているのも、当然のことなのかもしれません。

時計塔の制作者 関敏氏

円形公園にある時計塔は、国立市在住の石の彫刻家として知られた関敏氏の作品です。同氏の作品がまとめられた図録⁶などで紹介されているので、ご存じの方は多いかもしれません。

時計塔創設当時の新聞報道では、時計塔の制作について、「双葉からクキが伸び花が咲くという、草花の生長する過程を象徴化した」（『毎日新聞』）、「空間のひろがりをもこのフォルムに託した」（『朝日新聞』）と制作者の関氏が説明した内容が報じられています。「文教都市の玄関にふさわしい形を求めて苦心した」（『朝日新聞』）ことも示されています。

また、この時計塔については、近年作者自らが新



写真6 時計塔除幕式：前列の髭を貯えた男性が関敏氏



写真7 現在の時計塔：2023年4月撮影

たな事実を語っています⁷。それによると時計塔の時

6 『関敏一石に聴く一』（財団法人たましん地域文化財団、1998年）

7 『国立三角駅舎物語』（国立市観光まちづくり協会、2020年）「石の彫刻家 関敏」51頁。なお時計塔の費用については、1979年当時、『東京新聞』で「費用は約三百五十万円」、『毎日新聞』で「総工費約三百万円」と報じられています。

計部分（草花の花にあたる部分）については、当初は丸く作る予定であったとのこと。費用面の問題で結果的に四角の形状となったようですが、これが丸い形をしていたら、また違った印象の時計塔として駅前で存在感を示していたことでしょう。

現在も旧国立駅舎の庇の下から大学通り方向を眺めると、写真1に近いアングルで時計塔を眺めることができます。ただ何気なく眺めるよりも、作者の意図や苦労話を踏まえて時計塔を鑑賞すると、新たな気づきがあるかもしれません。時間を確認する際、ちょっと意識して時計塔全体のフォルムを鑑賞するのも「オツなもの」です。

時計塔の制作者である關敏氏は、本年（2023年）2月8日に残念ながら永眠されました。石の彫刻家として知られた同氏の作品は、さまざまな場所で観ることができます。国立市内では谷保天満宮にその作品の幾つかが建立されています。

「和魂漢才」碑、原田重久先生句碑や山口瞳先生文学碑などの作品の中でも、拝殿へ向かう参道脇にある「座牛」は、知る人の多い作品のひとつでしょう。



写真8 「座牛」：2023年4月撮影



谷保天満宮の丑年生まれの氏子たちによって1973（昭和48）年に奉納されたこの「座牛」は、約3トンの原石から彫り出され、その制作期間はおよそ4ヶ月に及んだものだったそうです。石の素材に適う牛のフォルムを検討した同氏は、次のような「ちょっとしたアイデア」を思いつきます。

「非常に簡単なことで、座牛の鼻先を十センチ程台座から前に出すと言うことである。彫刻作品の多くは、台座の範囲内に納めるのが、ごく普通である。台座から突き出た鼻面は、どうにも気になり、触りたくなる、こんな心理を利用したのであるが、この試みは成功した」⁸

これらの「座牛」に関する情報は、制作者である關敏氏本人が著した記録に拠るものです。同氏は、「本人が自作の作品の解説をすべきではないのではないかと思っている」と述べていますが、「自分の制作の過程を記録して置きたい（原文ママ）と言う欲求が勝った」ことから、自らの作品について語られています。「語れば語る程に自己矛盾に陥る」⁹とされながらも綴られた著述、『石に聴く石を彫る』には、作品鑑賞におけるポイントが提示されていて、様々な気づきを得ることができます。

「座牛」と同じく谷保天満宮に建立された「山口瞳先生文学碑」については、「碑文は、山口先生の書かれた色紙を拡大したもので、この文字には、最も神経を使った」と記されており、さらに「この文学碑には、小さな仕掛けをしたのであるが、これに気づいた人は以外（原文ママ）に少なかった」¹⁰とも述べられています。



写真9 「山口瞳先生文学碑」：2023年4月撮影

8 關敏『石に聴く石を彫る』（里文出版、2000年）「座牛」81頁
 9 この段落の引用はいずれも前掲註8「序にかえて 石に聴く」8頁
 10 この段落の引用はいずれも前掲註8「山口瞳先生文学碑」131頁



写真 9-2 山口瞳先生文学碑 建立記念文鎮

文学碑の碑文を約 10 分の 1 に縮尺した文鎮で、当館企画展『くにたちを愛した山口瞳』展で作成されたもの。關敏氏は同企画展の開催について、「大盛会であった」と述べられています。

谷保天満宮の梅林に建つ文学碑を眺めつつ、作品に施された「小さな仕掛け」を発見するのも楽しい鑑賞方法ではないでしょうか。

円形公園の時計塔につづき、東京国立ロータリークラブの創立 20 周年記念事業として、くにたち市民芸小ホールの前庭に寄贈された作品「^{ひだ}襷」の紹介



写真 10 「襷」：2023 年 4 月撮影

など、『石に聴く 石を彫る』の中では、国立市内外に建立された数多くの作品が紹介されています。この本を片手に、お近くにある關敏氏の作品を巡ってみるのは如何でしょうか。きっと、新たな気づきや発見をすることができるでしょう。

(2023.06.15：中村記)